

偶像を打破するアブラハム

—第二神殿時代文学・ラビ・ユダヤ教文献・クルアーンでの解釈の変遷—

勝又悦子

要旨

三大一神教の祖とされるアブラハムが唯一神の認識に至る道程は、ヘブライ語聖書では描かれていない。しかし、第二神殿時代文学、ラビ・ユダヤ教文献、タルグム（アラム語訳聖書）、クルアーン他には、いかにアブラハムが、唯一の神を認識し、父の代までの偶像崇拜と対決し、画策の上、打破したかを描く共通の構成要素からなる伝承が広く存在する。本稿では、おそらく高い人気を博したと思われるこの「偶像を打破するアブラハム」伝承を、『ヨベル書』『アブラハムの黙示録』『創世記ラッパ』『タルグム・偽ヨナタン』そして、イスラームの『クルアーン』から訳出し、共通する構成要素を抽出し、強調点の相違、また父テラへの関係の相違から比較する。その結果、『ヨベル書』では唯一神の認識の重要性、『アブラハムの黙示録』では偶像崇拜との対決が、『創世記ラッパ』『タルグム・偽ヨナタン』では様々な構成要素が万遍無く現れ、聖書解釈としての整合性の維持への関心が強いこと、また、『クルアーン』でのアブラハムは、地元住民への唯一神観念の導入を果たす役割に重点が置かれていることが窺える。

キーワード：アブラハム、一神教、偶像崇拜、聖書解釈

1. 序

主として創世記11章—24章に登場するアブラハムはユダヤ教、キリスト教、イスラームの三大一神教の祖であり、それぞれの宗教において、各自のルーツとして重要な役割を果たしている。例えば、ユダヤ教では、最も重要な父祖とされ、スリーホートやヨム・キップールの典札に見られるように、一人息子であるイサクを捧げようとしたアブラハムはイスラエル全体の救済の根拠として考えられている¹⁾。キリスト教では、「信仰による義の人」であり²⁾、キリストと関係づけられることでキリスト教徒全てがアブラハムに直結された³⁾。またイスラームでは、父祖イシュマエルの父であり、メッカ、カーバ神殿の創設者として敬意を抱かれている。欧米では、一神教のことを「アブラハムの子孫」(*Abraham's Children*) や「アブラハムの信仰」(*Abrahamitic Faith*) のようにアブラハムにちなんだ名称で呼ぶことも多い⁴⁾。三大一神教の相互理解が図られる際に

も、アブラハムは、これら三者の宗教に共通する人物であるがゆえに、三者の相互理解、対話の際の一つの材料であり、キーパーソンになっているように思われる⁵⁾。特に、ヘブライ語聖書でのアブラハムが、それぞれの宗教でいかに受容されたか、解釈されたかについての研究が多い⁶⁾。

ヘブライ語聖書中のアブラハムの生涯には様々な事件が起こる。そのそれぞれの事件に対して、膨大な解釈が各宗教にはあるが⁷⁾、中でも筆者が関心を寄せるのはヘブライ語聖書でのアブラハムの物語が始まる以前、つまり創世記12章冒頭にて神の命により父の家を離れて放浪する以前の状況を描いた一連の物語伝承である。

該当するヘブライ語聖書箇所は以下のとおりである。

創世記11章26－27節⁸⁾

²⁶テラが70歳になったとき、アブラム、ナホル、ハランが生まれた。²⁷テラの系図は次のとおりである。テラにはアブラム、ナホル、ハランが生まれた。ハランにはロトが生まれた。²⁸ハランは父のテラより先に、故郷カルデアのウルで死んだ。

この後、アブラハム、ナホルが嫁をめとり、アブラハムの妻サライが不妊であることが記されたのち、創世記12章のアブラハムの召命の場面につながる。上記のヘブライ語聖書本文は系図の記述であり、全く何の事件も起きていない。しかし、聖書のこの箇所に対して、第二神殿時代以降の文学は、アブラハムが故郷、父の家で何をしていたかに強い関心を寄せ、豊かな伝承群を発展させた。その中で、広く見受けられるのが、「偶像を打破するアブラハム」⁹⁾と総称できる一連の伝承である。これは「アブラハムの父親テラが偶像崇拝者であった／育った環境が偶像崇拝の地であった」が、「アブラハムは何らかの手段で一神教の認識に至り、父親／地域住人と対立しながら、戦略的な手法に訴えながら偶像を破壊し、また地域住人／当時の支配者との論争から火に投げ込まれながらも生還し、アブラハムが崇拝する神の正しさを体現する」という物語である。

これは、言うまでもなく、ヘブライ語聖書では全く言及されていないし、暗示もされてもない内容である。しかし、第二神殿時代の外典・偽典文学や、その後のラビ・ユダヤ教文献、タルグム（アラム語訳聖書）、クルアーンには同種の伝承が広く見出される。つまり、第二神殿時代以降の様々な思潮、文学伝統の中で極めて広く流布していた人気のあるテーマであったことが窺える。他方、同時代のキリスト教のアブラハム伝承や注釈においてこの種の物語が言及されることは少ない¹⁰⁾。

この「偶像を打破するアブラハム」伝承は、学術研究や一神教比較研究等で「言及」されることはあるが、紙幅の都合上、実際のテキストが紹介されることはなく、内容を要約した限定的な言及にならざるをえなかった¹¹⁾。先述の一神教におけるアブラハム像

に関する研究では、どうしても、特定の宗教、文化伝統におけるアブラハムの受容論にならざるをえない¹²⁾。よって、単独の書のテキストは詳細に研究されることはあっても¹³⁾、複数の文化伝統、宗教を超えて、テキストが同時並行的に扱われることは少ない。更に、このアブラハムが偶像を打破する物語は、内容が、大衆的、庶民的であることも関係しているのか、いわゆる学術的研究の対象にならなかったとも思われる¹⁴⁾。また、ヘブライ語聖書では全く示唆されていない上に、新約聖書などのキリスト教文書にも表れず、上記の文書群は邦訳でのアクセスが容易ではないために、古代世界ではアブラハムに関して非常に流布した物語伝承であるのに日本では認知度が低い。

そこで、本稿では、この「偶像を打破するアブラハム」に関する様々な伝承のテキストを訳出、紹介し、テキストに基づいて各文書におけるこの伝承の特徴を分析することを目的とする。ヘブライ語聖書に全く言及のない物語が聖書の背後に豊かに存在しており、その物語を、第二神殿時代文学、ユダヤ教、イスラームが、宗教の枠を超えて広く共有していることを認識するとともに、この物語伝承がそれぞれの伝統の中でどのように受容されているかの理解を図ることにより、それぞれの文学が置かれた環境、宗教伝統のより一歩深まった相互理解の一助になることを目的とする。

本稿では、1. 『ヨベル書』 (*Book of Jubilee*)、2. 『アブラハムの黙示録』 (*Apocalypse of Abraham*)、3. 『創世記ラッバ』 (*Berehish Rabba*)、4. 『タルグム・偽ヨナタン』 (*Targum Pseudo-Jonathan*)、5. 『クルアーン』に見られるこの物語伝承を掲載した。他にも類似の伝承を有する文書はあるが¹⁵⁾、それらについては稿を改めて論じたい。

『ヨベル書』とは、モーセがシナイ山で過ごした40日間の間に、大天使が天地創造からの出来事をモーセに語るという形式をとる書物である。最大の特徴は、様々な出来事が独特の時間軸に沿って年代づけされていることである。天地創造を元年として、7年を1シャブア（本稿では「周」と訳出）、7シャブア（周）つまり49年を1ヨベル期¹⁶⁾とする時間単位で、イスラエルの民に起こった事柄を年代づける。たとえばアブラハムの誕生は、第39ヨベル期第2周第1年とされる。これは、天地創造から $49 \times 38 + 7 \times 1 + 1 = 1,870$ （年）ということになる。現存するのはギリシア語テキストであるが、原語はヘブライ語であったことはほぼ定説となっている。成立年代には諸説あるが、クムラン文書の中にヨベル書に依拠したものがあること、マカベア戦争（B. C. 167–162）を示唆する記事があることなどから、紀元前150年前後には成立していたのではないかと考えられている¹⁷⁾。

『アブラハムの黙示録』は、アブラハムに下された啓示を拡張した黙示文学で旧約偽典に分類される。しかし、その大半は創世記12章で啓示が下される以前のアブラハムに

ついでに伝説を伝えるものになっている。本稿で引用する個所が表しているように極めて強い偶像崇拜に対する反発がある。偶像崇拜 vs. ユダヤ教とも表すべきグノーシスの二元的世界観に基づいていると考えられる。時代的には、第二神殿崩壊を描写しており、またクレメンティヌスには知られていたことから、紀元後70-150年前後の成立と考えられる。現存は、スラブ語写本のみであるが、古くはヘブライ語版があったことはほぼ確実とされる¹⁸⁾。

『創世記ラッパ』とは、第二神殿崩壊後のラビ・ユダヤ教が産み出した口伝トーラー文学の中の、特に創世記に関する解釈を収集した書である。本稿で扱う伝承の平行個所は、ラビ文献上に20か所以上に上るが、ギンズベルグらの説に従い、その中でも最もオリジナルに近いと考えられる『創世記ラッパ』の記事を本稿では取り上げた¹⁹⁾。

『タルグム・偽ヨナタン』は、アラム語訳聖書の一つである。第二神殿時代以降、聖書のヘブライ語の理解が難しくなった読者、聞き手のために、彼らの生活言語であったアラム語に聖書を翻訳する作業が進んだとされる。子どもが学ぶ学校などでの聖書の学びの第一歩でもあったらしい。タルグムが果たして、ラビ・ユダヤ教の渦中の産物か否か、意見が分かれる。偽ヨナタンは、中でも敷衍の多いタルグムで、独自の世界観に基づくと思われる²⁰⁾。

『クルアーン』はイスラームの根本の聖典であるが、伝承によれば、預言者ムハンマドに、御使いジブリエルによって、22年かけて顕現されたとされる。ヘブライ語聖書、ユダヤ教の様々な口伝トーラー、新約聖書との関係も、昨今論じられている²¹⁾。

2. テキスト訳出と構成要素

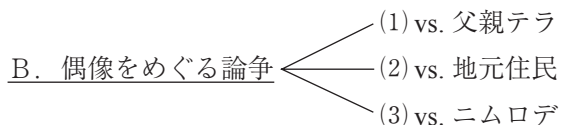
一般に、『ヨベル書』と『アブラハムの黙示録』は第二神殿時代の偽典文学とされる。また、『創世記ラッパ』、タルグム類と『クルアーン』も比較的時代が近く内容的にも近いと思われる。そこで、この二つのグループに分けてテキストを併置して表示した。厳密にはそれぞれのテキスト内容が並行しているわけではないが、併置することで、その相違、共通する傾向がより明らかになると思われる。『創世記ラッパ』、『タルグム・偽ヨナタン』以外はそれぞれヘブライ語、アラム語原典から訳出、その他の書については既存の英訳を基に訳出、また『クルアーン』については井筒訳から引用した。

これらの伝承群を一覧にすると、次のような核となる構成要素がある。更に、それぞれの構成要素は、いくつかのバリエーションに分かれる。その構成要素を以下のように、A～Eに分け、バリエーションがある場合には(1)～(3)で表し、以下の一覧にも記入している。

構成要素

A. アブラハムによる唯一神の認識

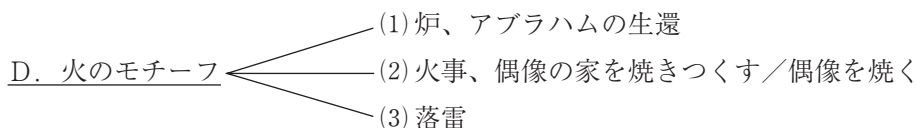
アブラハムが唯一神の認識に至る場面である。偶像崇拜の論争の中での場合（『創世記ラッパ』）と、アブラハム単独の思索（『ヨベル書』）によって、万物を動かす存在の認識に至る場合がある。



アブラハムが、実際に偶像崇拜の愚を論駁するという内容である。相手が父親の場合(1)、地元住民の場合(2)、そして、支配者ニムロデ(3)の場合に分けられる。

C. 偶像破壊行動

アブラハムが偶像破壊に行動を移す場面である。偶像の愚をアピールする場合と、単に焼却する場合がある。



本稿であげたどの伝承にも共通してみられるのが、この火のモチーフである。偶像論駁の末、アブラハムが落とされる炉であったり(1)、アブラハムによる放火であったり(2)、天からの落雷の場合(3)もある。原因は異なるが、何らかの形で火が介入してくる。このDは、次のEとも結び付いており、ハランの死の原因になることが多い。そもそも、火がこの伝承の共通のモチーフになっているのは、ウルという地名との関連があるとされる。タルグムでは創世記15.7でウルの地名に関して、火が言及されている²²⁾。また、ニムロデが言及されるのは、アブラハムが聖書に登場する少し前に、バビロニアの権力の象徴でもあるバベルの塔の話が記載されていることから、バビロニアの権力者であるニムロデがアブラハムと同時代だったという推察が働いたものと思われる。

E. 兄ハランの死

アブラハムの兄、ハランの死。これは、ヘブライ語聖書では、一文で短く言及されることである。しかし、『創世記ラッパ』、『タルグム・偽ヨナタン』では、ハランの死を説明するために、この一連の伝承全体があるようだ。他方、ハランの死を示唆しているだけの文書もある。

以下、訳文中の【 】内の符号は、上記の構成要素のうち関係するものの番号である。また、特にその構成要素にかかわる訳出テキストには網掛けをしている。

I. 第二神殿時代文学

『ヨベル書』 ²³⁾ 11.14～	『アブラハムの黙示録』 ²⁴⁾ 1章～
<p>11章【A. 唯一神の認識】</p> <p>¹⁴第39ヨベル期、第2周1年目、テラは妻をめぐらした。その名はエドナであった。父の姉妹であるアブラムの娘であった。¹⁵そして、その週の7年目に、彼女は彼に息子を産み、彼は彼をアブラムと呼んだ。それは彼女の母親の父にちなんだ名前であった。というのは、彼がその娘が子どもを成すまえに死んでしまったからだ。¹⁶そして、この子どもは、彫られた像、汚れたものを頼ることにより地上が迷っていることを理解し始めた。彼の父は彼に書くことを教えた。彼が第2週の年であった。¹⁷そして、彼は、父の偶像崇拜をしないように父から自分を離そうとした。それで、彼は、全てのものの創造主に、人間の子孫の罪から自分を救ってくれるように、そして、自分の持ち分が不浄とあくどさに従う過ちから救われるように祈り始めた。</p> <p>¹⁸耕した地に種を植える種植えをする時期に</p>	<p>1章【A. 唯一神の認識】</p> <p>¹ある日、私が私の父テラの神と、私の兄ナホルの神を守っていた。その時、私はどの神が、真実で最も強いのかを試していた。²その時、私アブラハムに順番が回ってきた。私は、私の父テラが彼の木の神、石の神、金の神、銀の神、銅の神に、鉄の神に、犠牲をする準備を終えて、³それらの神殿に仕えるために入ったところ、マルマトという名の石を彫った神が、鉄の神ナキンの足元に落ちていたのを見た。⁴それを見たとき、私の心は戸惑った。そして、心の中で思った。アブラハムよ、それが元あった場所にもどすことはできない。というのもそれは石で（できていて）とても重い。⁵しかし、父親のところに行つて言うと、私と一緒に入ってきた。⁶そして私たちが一緒にそれを持ち上げ元のところに置くと、まだ、わたしがその頭を押さえているのに、その頭が落ちてきた。⁷そし</p>

なった。彼らは皆植えた種をカラスから守るために出かけて言った。アブラムも彼らとともに出かけて行ったが、その子どもは14歳の少年であった。¹⁹すると、カラスの大群がやってきて、種をむさぼり食おうとした。それらが地上に降り立つ前に走っていき、彼らが地上に降りて種をむさぼり食う前に彼らに対して叫んで言った。「降りてくるな。お前たちの場所に戻れ」。すると彼らは戻っていった。²⁰それで、彼はカラスの大群をその日70回にわたり追い返し、地上のカラスはすべて追い払った。²¹そして、そこに彼と共いた人は皆、彼が叫ぶとカラスが戻って行くのを見た。それで彼の名前は、カルディア人の国中で有名になった。²²その年、種を植えようとする者は、彼のところにやってきて、彼は、彼らとともに種まきが終わるまでいた。²³そして、第5週の最初の年、アブラムは、斧のための器具と、木でできた道具を作る者たちに教えて、彼らは地上を覆う器を作った。それを畑の畝にかぶせ、そこに種を載せると種はそこから畝のくぼみに落ちて、地の中に隠された。それで彼らはもうカラスを畏れることはなくなった。²⁴このようにして彼らは覆いを畑の畝の縁に作り、アブラムが命じたように種を植え、その土地をずっと耕し、彼らはもはや鳥を恐れることはなくなった。

12章【A. 唯一神の認識・B. (1) 偶像をめぐる論争 vs. 父親】

¹第6周、7年にアブラムがテラに言った。

て、私の父は、彼の神マルマトの頭が落ちるのを見ると、私に言った。「アブラムよ」。⁸そして、私は言った。「私はここです」。そして彼は私に言った。「斧を家から持ってこい」。それで私はそれらを家から持って来た。⁹そして、彼は、別の石から頭の無い、別のマルマトを切り出して、マルマトから落ちた頭とマルマトの残りをたたき割った。

2章¹彼は五体の神を作り、私に与え、私に、それらを外の街路で売るように命じた。²私は、父のロバにのり、それらを積んで、それらを売りに大路を歩いた。³そして見よ、シリアのパンダナからの商人たちが、ラクダでやってきた。彼らは、エジプトにナイルのkokonil²⁵⁾を買い付けに行くところだった。⁴私は彼らに質問した。彼らは私に答えた。そして、一緒に会話をしながら進んだ。彼らのラクダの一头がわめいた⁸。ロバは、驚いて逃げて、神々を落としてしまった。⁵それらのうちの三体はこなごなに碎け、二体は無事だった。シリア人は、私が神を持っていることをみて、私に言った。「なぜ、神を持っていると言わなかったのか。ラクダの声でロバがびっくりして、あなたがそれで損をする前に、それを買ったのに」。⁶せめて残っている神を私たちによこしなさい。相応の代金を払おう」。⁷私は心の中で考えた。彼らは、粉々になった神と残っている神の分を払ってくれた。⁸というのは、私は心の中でどれだけ私は父に支払いを渡せるだろうと悲しんでいたからである。⁹私はこれら

「父よ」。²そして、彼は言った。「私はここにいる。息子よ」。

「あなたが崇拜し、お辞儀をする偶像からどんな助けと利益を得ることができるのですか。³彼らには何の精神もない。彼らは、聞こえず語れず、こころを惑わす。彼らを崇拜することはやめましょう。⁴天の神を崇拜しましょう。雨を降らし、露を地上に置かれる方を。地上の全てのことをなされる方を。そして、全てのものを彼の言葉によって創造された方を。全ての命が彼の眼前からできた方を。⁵なぜ、あなたは精神のないものを崇拜するのですか。彼らは何も助けてはくれないのに。なぜ肩に彼らを担ぐのですか。何も助けてくれないのに。彼らは、彼らを造るものに大きな恥をもたらすのに。それらを崇拜する者の心を惑わすのに。彼らを崇拜することはやめましょう。」⁶父は彼に言った。「私にも分かっている。しかし私にそれらを崇拜させる人々をどうしたらいいのか。⁷もし、彼らに真実を言えば、私を殺すだろう。というのは、彼らの魂は、それらにべったり傾倒しており、崇拜し、敬っているからだ。⁸静かにしておきなさい。お前が殺されないように」。こうした言葉を彼の二人の兄に語ったところ、彼らは彼に対してとても怒ったので、彼は沈黙した。

⁹そして、第14ヨベル期の第2周、第7年にアブラムは妻をめとる。その名はサライと言った。父の息子の娘であり、アブラムの妻となった。¹⁰彼の兄ハランも、第3周、第3年に妻をとり、その週の第7年に息子が生ま

三体の壊れた（神）を、その場所のゲル川に沈めた。

3章¹私は、まだ道を歩いていたが、私の心は戸惑い、乱れていた。²心の中で言った。「私の父のしていることのこの不平等なことは一体どういうことか。³父が彫り、彼の計画と技術で、彼らは生まれているのだから、彼の神々の神は、むしろ父なのでないか。⁴彼らは、私の父を敬うべきだ。なぜなら、彼らは彼の作品だからだ。では、その作品での父の食べ物は何か。⁵見よ、マルマトは倒れて自分の聖所に立つこともできない。⁶そして私自身も父が来なければ、それを持ち上げることもできない。私たちがそうしても、その頭は落ちてきた。⁷そして、別の五つの神は、ロバからおちて砕けてしまった。彼らも自分自身を救うこともできず、自分たちを壊したからと言って、ロバを傷つけることもできない。そして、川から上がってくることもできない」。⁸それで、私は心で思った。「もしそうなら、どうして彼らは、私の父の神マルマト一頭は別の石で、他の石から作られているもの一が、人間を救い、人間の祈りを聞き、彼らに何か贈り物をするすることができるのだろうか。」

4章【B. (1)偶像をめぐる論争 vs. 父】

¹そんなことを考えながら、私はロバに水をやり、干し草をやった。そしてわたしは銀を取り出し、それを父、テラの手においた。²彼はそれを見て喜んで言った。「お前は祝福

れ、ロトと名付けた。¹¹彼の兄弟、ナホルも妻をめとった。

【C. 偶像破壊行動・D. (2) 火のモチーフ：火事、偶像の家を焼き尽くす・E. 兄ハランの死】

¹²アブラムの生涯16歳のとき、第4週の第4年、アブラムは夜起きて、偶像の家を燃やした。その家にあったものすべて燃やした。しかし、誰も知らなかった。¹³彼らは夜中に起きて、彼らの神を救おうとした。¹⁴ハランは急いで助けようとし、火にのまれて、カルデアのウルで、テラよりも先に死んだ。それで、彼らはハランをカルデアのウルに葬った。

¹⁵テラは、カルデアのウルを出立し、息子たちとともにレバノンに入り、カナン土地に住んだ。そして、ハランの土地に住んだ。アブラムはテラとともにハランの地に、2周年住んだ。

【A. 唯一神の認識】

¹⁶そして、第6周、第5年に、アブラムは第7月の新月の日に一晩中起きて、夜から朝への星の運行をみた。雨についてのその年の特徴を見るためであった。彼は一人で座って観察していた。¹⁷すると、ある言葉が心に臨み言った。「星のしるしも、月のしるしも、太陽のしるしも、全て主の手にある。なぜ、わたしはそれを探そうとするのか。¹⁸もしかの人が望めば、かの方は、朝も夕も雨を降らせる。もし、かの方が望めば、かの方は、それ

されよ。アブラム。私の神の中の神によって。お前は、神の代価を持って来て、私の仕事を無為にしなかったからだ」。³私は父に答えて言った。「聞いてください、父、テラよ。神々はあなたによって祝福されているのです。あなたが彼らの神なのです。あなたが彼らを作っているからです。だから、彼らの祝福は偽物であり、彼らの力は虚しいのです。⁴彼らは自分を救うこともできない。それで、どうやって、あなたを助け、私を祝福するのでしょうか。⁵わたしがこのような反抗をするのはいいことでしょうか。というのは、私は、自分の良識によって、私はあなたに、打ち壊された神を持って来たからです。」⁶そして、彼が私の言葉を聞くと、激しく私に怒った。私が彼の神を冒瀆することを言ったからである。

5章【C. 偶像破壊行動・D. (2) 火のモチーフ：偶像を焼く】

¹しかし私は父の怒りを宥めると出て行った。私が出て行って、しばらくすると父は私を呼んで言った。「アブラムよ」。²私は言った。「私はここです」。³そして、彼は私に言った。「上ってきて、木切れを集めなさい。あなたが来る前にもみの木で神を作っていたのである。そしてそれで私の昼食を用意しなさい」。⁴木切れを選びにいくと、その中に小さな神が紛れているを見つけた。それは、私の左手の中にちょうどおさまった。⁵そしてその額には、バリサト神と書いてあった。⁶それで、私が、父のために食事を

を止めることができる」。

¹⁹そして彼は、その夜祈って言った。

「わたしの神よ、神よ、もっとも高き神よ、
 あなただけが私の神である。そして、あなた
 とあなたの支配を私は選んだ。そして、あな
 たが全てのものを創造された。全てのもの
 は、あなたの手による業である。²⁰邪悪な霊
 の手から救ってください。それらは、人間の
 心の考えを支配します。そして、彼らが、私
 を、私の神、あなたへの道からそらせないよ
 うに。そして私と私の子孫を確実にしてくだ
 さい。ここより、これ以上、道をまどうこと
 がないように」。

²¹そして、彼は言った。「私は私が戻るであ
 ろうかと私の顔を探しているカルデア人のウ
 ルに戻るべきだろうか。それとも、ここにと
 どまろうか。あなたへと至る正しい道は、あ
 なたの手の内に」。

²²そして、彼は話すのと祈るのをやめた。す
 ると、見よ、主の言葉が彼に送られた。「あ
 なたの国から離れて上りなさい。そして、あ
 なたの近親と、あなたの父の家から離れて、
 私があなたに示す土地に上りなさい。わたし
 は、あなたを偉大で多数の国民とする。

²³私はあなたを祝福する。

あなたの名前を偉大にする。

あなたは、地上で祝福される。

あなたを通して、地上のすべての家族は祝福

用意する時になって火に木切れをくべていた
 とき、食べ物の準備を調べるために出るとき
 に、私は、バリサトを火種の横に置いて、そ
 れ [バリサト神] を脅して言った。⁷「バリ
 サトよ、私が戻るまで、この火が消えないよ
 うに見張っておけ。もし火が消えたら、吹い
 て炎をあげろ」。⁸私は出掛けて行って用事
 をすませてきた。⁹そして、戻ってみると、
 バリサトがひっくり返って脚は火で覆われ、
 激しく燃えているのを見た。¹⁰それを見て、
 私は笑って独り言を言った。「バリサトよ、
 本当にお前は火をつけることができるし、料
 理ができるのだ」。¹¹そして、笑いながらこ
 んなことを言っているときに、彼はゆっくり
 と火の中で燃え尽きて灰になってしまった。
¹²私は、父に食べるものを運んだ。¹³そし
 て、ぶどう酒とミルクを与え、彼はそれを飲
 み陽気になって、彼の神マルマトを祝福し
 た。¹⁴私は彼に言った。「父テラよ、あなた
 の神、マルマトを祝福しないでください。彼
 を誉め讃えないで下さい。むしろ、あなたの
 神、バリサトを誉め讃えましょう。というの
 は、あなたを愛するあまり、彼は火の中に身
 を投じて、あなたの食べものを料理したので
 す」。¹⁵それで彼は言った。「では、今は、彼は
 どこにいるのか？」¹⁶それで、私は言った。
 「彼は炎の中に燃え尽きて粉塵となってしま
 いました」。¹⁷それで彼は言った。「バリサト
 の力の偉大なことよ。明日もう一体作ろう。
 そして明日、彼は食事の用意をしてくれるだ
 ろう」。

される。

そして、あなたを祝福するものを私は祝福しよう。

あなたを呪うものを私は呪う。

²⁴そして、あなたとあなたの子孫たちの、あなたの子孫の子孫たち、すべてのあなたの子孫の神となろう。恐れるな、これより地上のすべての世代に対して、私があなたの神である」。

²⁵そして、主である神は言われた。「彼の口、彼の耳を開きなさい。彼が、聞き、自分の口で、顕現された言葉で話せるように。というのは、その言葉は、それが（バベルで）拡散された日々以来、人間の子供の口からはすっかり止まってしまったからである。」

²⁶そして、私は、彼の口を開き、耳を開き、彼の唇を開いた。そして、私は、彼に、ヘブライ語で、創造の言語で、語り始めた。²⁷そして、彼は、父の書物を取り、彼らに転写し、それ以後、それを学び始めた。そして、私は彼に、彼が理解できないことを知らせた。そして彼は6カ月の雨季の間、学んだ。

²⁸そして、第6周、7年のときに、彼は父親に話して、ハランを離れてカナンの地に入って見て、戻ってくると話した。²⁹そして、彼の父親テラは、彼に言った。「平和のうちに行きなさい。あなたの永遠の神があなたの道をまっすぐにしてくれるように。そして、主が、あなたをすべての悪から守ってくれるように。そして人間の子孫が誰もあなたに害を及ぼす力をもたないように。平和のうちに

6章【B. (1) 偶像をめぐる論争 vs. 父親テラ】

¹アブラハムがこのような言葉を父から聞いたとき、私は心の中で笑った。そして苦さと魂の怒りで呻いた。²私は言った。「では、どうして、父が作った木切れの本体が、私の父の助けになるというのか。³それとも彼は、自分の身体を彼の魂に従属させ、彼の魂を彼の精神に従属させ、そして彼の精神をあなただけの無知なものに従属させることをできるのだろうか。⁴そして私は言った。「悪を我慢して、私の精神を清いものに投げ出そう。そして私の考えを彼にはっきりと明らかにしよう」。⁵私は、彼に答えた。「父、テラよ。あなたが、作り上げたこれらの神のどれをとっても、あなたは考え違いをしています。⁶見よ、私の兄弟、ナホルの神で、聖所に立っているのが、あなたのマルマトよりはるかに力があります。⁷というのは、見よ、ゾウハイオス、私の兄弟ナホルの神が、あなたの神マルマトより強大です。彼は人間が崇める金でできた神だからです。⁸そして、もし、彼が時と共に年老いたら、彼はまた型を取り直すことができます。しかし、マルマトは、もし、形が変わったり、壊れたりしても、型を取り直すことはできません。というのは、彼は石でできているからです。⁹では、ゾウハイオスとともに立つ、他の神々の神であるイオブはどうでしょうか。というのは、彼も、バリストよりも力があるからです。彼は木から彫り出され、銀のメッキを施されているからです。彼も比較すれば、その

きなさい。³⁰そして、その土地があなたの目に住むに快適に映ったなら、私をあなたと一緒に連れて行きなさい。そしてロトを、あなたの兄の息子であるロトをあなた自身の息子として連れて行きなさい。主があなたと共にいますように。³¹そして、あなたの兄弟、ナホルはあなたが無事に戻ってくるまでに、私と一緒に出るだろう。そしてみな一緒に行こう」。

外見は人間によって価値あるものとされるものです。¹⁰けれども、あなたの神、バリストはどうでしょうか。彼は、いまだ、彫られてもいないし、¹¹地に根ざして、驚嘆するほど大きくなったり、枝や花を咲かせることもない。¹²そうではなくて、あなたが、斧で作ったのです。あなたの技術であなたが神を作ったのです。¹³そして、見よ、もう、彼は乾ききって、彼の放漫さは減びてしまっています。¹⁴彼は高みより地に落ちてしまったのです。偉大さからちっぽけなものになってしまったのです。¹⁵彼の顔の外観も荒れ果ててしまった。¹⁶そして、自分で火によって燃え上がってしまい、¹⁷ただの灰になってしまった。¹⁸それなのに、あなたは言う。『もう一体作れば、彼が明日私に食事を用意してくれるだろう』と。¹⁹しかし、彼は減びる際に、もはや、自分自身の崩壊への力すら残してはいなかったのです。』

7章²⁶【A. 唯一神の認識・B. (1) 偶像をめぐる論争 vs. 父】

¹アブラハムは、このようなことを考えて、彼の父のところに来て言った。「父、テラよ。²火はあなたの神、金や銀や、石や木の神より強い。なぜなら、火はあなたの神々を燃やしてしまうからです。そしてあなたの神々は、燃やされて火に従うでしょう。そして、火は、彼らを燃やししながら嘲笑うでしょう。³しかし、火を神と呼ぶことはできない。なぜなら、火は水で消えてしまうからです。⁴水は、火よりも強い。というのは、水

は火に打ち勝ち、地を果実でもって安らげるからです。⁵しかし、それを神とも呼べない。なぜなら、水は地に従属するからです。⁶しかし、それを神とは呼べない。というのは、地は、太陽によって乾いてしまい、人間の仕事に従属するからです。⁷太陽は、地よりも強いと言えます。というのは、その光線によって全宇宙が照らされるからです。⁸しかし、それを神とは呼べない。というのは、夜が来れば、真っ暗闇になってしまうからです。⁹だが、月や星を神とは呼べない。というのは、彼らが光るのは夜だけだからです。¹⁰しかし、これらのことを聞いてください。私の父、テラよ、これらのもの全てを創造された神について宣言させてください。¹¹これこそが、天を真っ赤に染め、太陽を金色にし、月に星に光を与え、たくさんの水の中から地を乾かし、あなた自身を物事の中に置き、私を思考の当惑から救いだしてくれるのではなかったのですか。¹²唯一の神が彼自身を彼自身によって私たちに顕現されます。】

8章 【D. (3) 火のモチーフ：落雷・E. ハランの死】

¹私の父、テラに対して、私の家の前庭でこのような考えをした後に、全能なる方の声が天から私に下った。²「アブラハム、アブラハムよ」²「私はここにあります」と私は言った。³そして彼は言った。「あなたは神々の神、創造主をあなたの心の理解の中で探しているのだな。私が、その神である。⁴テラの元を去りなさい。あなたの父、その家を去り

	<p>なさい。あなたの父の家の罪にあなたが染まらないように」。⁵そして、私は出た。そして、私が出るとき、まだ、家の前庭を出る前であつたが、巨大な雷の音が響き、彼と彼の家、彼の家にあつた全てのものを、40キュービットにわたり地上にたたき落として焼いた。</p>
--	--

II. ミドラシュ（ラビ・ユダヤ教聖書解釈）、タルグム、クルアーン

『創世記ラッパ』 38・13 ²⁷⁾	『タルグム・偽ヨナタン』 ²⁸⁾ 創世記11.28	『クルアーン』 ²⁹⁾ 預言者章（スーラ21）
<p>【B. (1) 偶像をめぐる論争 vs. 父親】</p> <p>「そして、ハランはテラの前で死んだ。」(創11.28)</p> <p>ラビ・ヒツヤが言った。テラは、偶像崇拝の職人であつた。一度、彼は、アブラムにそれらを売るように託して、どこかに行ったことがあつた。ある男がやってきてその一つを買おうとした。「あなたは何歳ですか」。アブラムは彼に尋ねた。「50歳です」。それが彼の答えであつた。「ああ、なんという男か」。彼 [アブラム] は叫んだ。「あなたは50歳だというのに、出来て1日のものを買おうと</p>	<p>【B. (3) 偶像をめぐる論争 vs. ニムロデ・C. 偶像破壊行動・D. (1) 火のモチーフ・炉・E. ハランの死】</p> <p>ニムロデがアブラムを火の炉に投げ入れた時に、というのは、彼 [アブラム] が彼 [ニムロデ] の偶像を崇拝しようとしなかつたからであるが、火は彼 [アブラム] に対して彼を燃やしつくす力は何も持たなかつた。それで、ハランは決めかねていて、言った。「もし、ニムロデが勝つなら、彼の側につこう。もし、アブラムが勝つなら、彼の方につこう」。そしてそこに</p>	<p>【B. 偶像をめぐる論争 vs. 地域住民・C. 偶像破壊行動・D. 火のモチーフ】</p> <p>⁵²その昔、我らはイブラヒームに正しい生き方を授けた。あの男のことは我らも初めから良く知っていた。⁵³あれが父親とその一族に向かって「そうやって貴方が崇めたてまつているその彫像は一体なんです」と言ったときのこと。⁵⁴「わしらの先祖様がたの崇めておられたものじゃ」と一同が応える。⁵⁵「そででは、みなさん確かに道を踏みちがえておられたのですよ。御先祖様た</p>

いうのですか」。このとき、その男は、恥じて離れて行った。

【C. 偶像破壊行動】

別の時に、女性が皿いっぱい
の粉をもってきて彼 [ア
ブラム] に頼んだ。「これ
を彼ら [偶像] にささげて
ください」。彼は、棒を
もって、それらをたたき壊
し、棒を一番大きい偶像の
手に持たせた。彼 [アブラ
ム] の父親が戻ってきて、
彼を非難した。「何という
ことを彼らにしたのだ」。
「ああ、隠してはおけませ
ん」。彼は、返答した。「一
人の女性が皿いっぱいの素
晴らしい食事をもってき
て、彼らに捧げるように頼
んだのです。一体が叫びま
した。『私が最初だ』。する
と別の一体が叫びました。
『私が最初だ』。そうする
と、一番大きいのが立ち上
がり、その棒をもって、彼
らを壊してしまったので
す」。私を馬鹿にしている
のか」彼 [テラ] は叫ん
だ。「彼らにそんな知恵が
あるものか」。「あなたはご
自分の口が話したことをお

いた人々すべてが、火がア
ブラムに対して何の力もな
かったのを見ると、彼らは
互いに言いあった。「アブ
ラムの兄が、呪術と魔術の
使い手だったのではない
か。彼が火に対して呪文を
唱えてそれが自分の弟を燃
やしつくさないようにした
のではないか」。直ちに、
天から火が下り、彼 [ハラ
ン] を焼き尽くしてしまっ
た。それで、ハランは、父
テラの前で、故郷の地、カ
ルデア人が彼の弟アブラム
に作った炉で焼け死んだの
である。

ちも、貴方方御自身も」と
言う。⁵⁶「これ、お前、本気
でそんなことを言っている
のか。それとも悪ふざけし
ているのか」⁵⁷「とんでも
ない。みなさんの本当の主
は、天と地を続べ給うお
方、それを初めてお創りにな
ったお方なのです。私は
その証人の人です。⁵⁸誓っ
て申します。みなさんが私
に背を向けてあちらへ行っ
てしまったあとで、必ず私
がああ偶像どもに一泡吹か
せて見せましょう。」とそ
う言って、⁵⁹彼は（邪神の
彫像をことごとく）ばらば
らに叩きこわしてしまっ
た。但し、たった一つ、大
物だけを残しておいた。こ
れは（あとで）みながこの
ものところへやってくる
ように（わざと）そうして
おいたのであった。⁶⁰
「我々の神様がたにこんな
真似をしたのは誰だ。まっ
たくひどいことをする人も
あるものだ」と皆が騒ぎだ
せば、⁶¹「あの方々（神様
のこと）のことをあげつら
う若造がおるとい話だ。
イブラヒームという名だそ

聞きにならなかったのですか」。彼をなじった。

【A. 唯一神の認識・B.

(2) 偶像をめぐる論争 vs. ニムロデ・D. (1) 火のモチーフ：炉・E. 兄ハランの死】

それで、彼〔テラ〕は彼〔アブラム〕を捉えて、ニムロデのところに使わした。「火を拝もうではないか」。ニムロデが提案した。「ならば、火を消してしまう水を拝もうではありませんか」と彼〔アブラム〕は答えた。「では、水を拝もう」。「いや、水もたらす雲を拝もうではありませんか」。「では、雲を拝もう」。「では、雲を追い散らす風を拝みましょう」。「では、風を拝もう」。「いや、風に立ち向かう人間を拝みましょう」。「おまえはただ、言葉を弄んでいるだけだ」。彼〔ニムロデ〕は叫んだ。「我々が拝むのは火だけだ。さあ、お前を、火の中に投げ込んでやろう。さあ、お前が信じるお前の神に来てもらい、救っ

うな」と言うものがある。

⁶²「よし、その者を公衆の面前に曳き出せ。何か証言する者があるかもしれん」と言う。⁶³「これ、イブラヒムよ、お前か、我々の神様がたにこんなまねをしたのは」と一同が尋ねた。⁶⁴「いえいえ、ほら、この大物のしわざです。あの連中（こわされた神々を指す）にきいてごらん下さい。もし彼らに口がきけるものなら」と彼が言う。⁶⁵そこで一同、額を集めて協議となり、「悪いのはこちら側だった」と言う。⁶⁶（しかし反省したのもつかの間）、たちまちひっくり返って「この方々に口がきけないことはお前、はじめから知っていたくせに」。⁶⁷「さ、そこです」と彼が言う、「それではみなさん、アッラーをよそにして、毒にも薬にもならないようなものを神と崇めていらっしやるんですね。⁶⁷いやはや、なんとなさげないことか、アッラーをよそにして、あのようなものを崇めるとは。みなさん、わからない

<p>てもらえ。</p> <p>さて、そこに立っていたハランは決めかねていた。</p> <p>「もし、アブラムが勝てば、私はアブラムの信仰者だと言おう。しかし、もし、ニムロデ勝つなら、私はニムロデの側だと言おう。」アブラムが燃えさかる炉の中に投げ込まれた。しかし、彼は救出された。ニムロデが「ハランに」尋ねた。「おまえはどっちの側だ」。「アブラムの側です」と彼「ハラン」は答えた。それで、彼は彼を捉えて、彼を火の中に投げ込んだ。そして彼は父親の前で死んでしまった。</p>		<p>のですか」。⁶⁸「あれを火あぶりにしてしまえ。どうせやるなら、君たちの神々の方にお味方申せ」⁶⁹そこで、我ら（アッラー）は、「これ、火よ、冷たくなれ。イブラヒームに危害を加えるな」と命じたのであった。⁷⁰彼らは彼に悪だくみをしたが、逆に我らが彼らに大損させてやった。⁷¹そして彼とルート（ロト）とを救い出し、万民のために祝福の地ときめたところに連れて行ってやったのであった。</p>
--	--	--

3. 構成要素からの考察

以上のテキストの中で、上記の構成要素が各書の中で、どのように表現されているか、重点の置き方の違い等の特徴から各書の特色をみてみよう。

『ヨベル書』

A. 唯一神の認識、B. (2) 偶像崇拜論争 vs. 地元住人、が中心となる。

『ヨベル書』の場合、アブラハムは既に生まれて間もなく偶像崇拜の愚を悟っており(11.16)、創造主たる神を認識しており(11.17)、偶像の愚を父テラに説く。しかし、『アブラハムの黙示録』や『創世記ラッパ』のように、偶像の無力さを揶揄するような策略によってその愚をアピールするのでなく、単刀直入に偶像が「精神を持たない」「人を惑わす」「助けにはならない」ことを説くという手法である。また、第6周第5年

には、天体の運行から全てを支配する存在への認識に再び至っている。

加えて、上記引用箇所に見られるカラスの来襲に対抗するアブラハムのエピソード(11.18-20)についても、アブラハムの誕生以前の出来事に、首長マツエマがカラスを来襲させて住民を困らせており(11.11)、さらにその首長マツエマ時代に偶像崇拜が蔓延していたこと(11.4-6)の記述があることを考えると、このアブラハムとカラスの対決も一種のアブラハムと偶像崇拜の対決とも言える。しかも、その対決を、アブラハムが知的営為とも言える道具の作成によって成し得ている点は興味深い。

偶像を巡る論争では、一見父テラとの論争であるように見えるが、テラの言葉「地元住民が崇拜しているから」(12.6)という言葉から明らかのように、テラ自身も偶像崇拜の愚を認識していることより、本当にアブラハムが対峙しているのは地元住民であり、B. (2)に属すると考えられる³⁰⁾。また、A. 唯一神の認識、B. 偶像をめぐる論争に関する言及は、何度も登場するのに対して、実際に偶像に手を下すC. 偶像破壊行動や、D. 火のモチーフ、E. ハランの死については、アブラハムが偶像の家を焼却する場面(12.12-14)に短くまとめて表れている。他の伝承のように、殊更ハランのずる賢さを主張するようなエピソードは表れない。その後再び、天体の動きから万物を動かす主の認識に至るといふA. 唯一神の認識の構成要素が表れる(12.16-21)。

『アブラハムの黙示録』

一読して分かるように、偶像崇拜との闘いが、『アブラハムの黙示録』での「偶像を打破するアブラハム」伝承の主眼のテーマと言える。本稿で訳出した部分では、一貫してB. (1)偶像をめぐる論争 vs. テラ、C. 偶像破壊行動を中心に展開する。当初は父テラと協同して偶像崇拜に関わっており偶像の愚かさ、無力さが伏線として語られる(1・2・3章)。その過程でアブラハム自身が偶像崇拜の愚を思考によって理解し(B. (1))、その結果、バリサト神を燃やすという偶像破壊行動に出る(5章、C, D. (2))。偶像崇拜の愚を父親テラに主張するが聞き入れられず(7章、A, B. (1))、父親と決別する。ここには、偶像崇拜との対決だけでなく、アブラハム自身の思考の成長と出立の物語としても考えられる。ここで、バリサト神を燃やしたり、天からの火が下るといふ展開に、Dも読み取れる。

本書の伝承では、「マルマト神」「バリサト神」「石でできた像」「銀でできた像」「金でできた像」というように、神の名前と材質、設置の仕方等の記述が非常に具体的である。これは『アブラハムの黙示録』という文書自体が、偶像崇拜を具体的に身近に見知っていたということを窺わせる。本稿で訳出した「偶像を打破するアブラハム」伝承が、『アブラハムの黙示録』という文書自体の始まりであること、それが全書32章の中

での占める割合（章数上は4分の1）ことから、偶像崇拜打破が非常に、切実した重要なテーマであったことが窺える。落雷で全てが焼き尽くされた場面（8.5）で、ハランの死（E）は、明言はされないが、本稿で引用した個所以降にハランの姿は現れないことから、Eの要素も含まれていると思われる。

『創世記ラッパ38・13』

B. 偶像をめぐる論争、C. 偶像破壊行動、D. 火のモチーフ、がメインである。ニムロデとの論争の中で、A. 唯一神の認識にかかわる議論が展開される。ただし、ここでは、アブラハムが純粋に神に到達する過程の記述ではなく、既にアブラハムが到達した結論をニムロデの論駁のために用いている。創世記ラッパでは、E. ハランの死も重要なテーマになっている。このように、創世記ラッパでは、先述の構成要素が万遍なく表れているのも一つの特徴である。これは、創世記ラッパの目的が、偶像崇拜に対する論駁のためだけでなく、「ハランが父よりも先に死んだ」（創11.28）という創世記の句の解説のためであることも、構成要素を完備する動機になったのかもしれない。子どもが親よりも先に命を落とすことには、何か理由があったに違いないと考えられた。加えて「テラよりも先に」（創世記同所）の「先に」に当たるヘブライ語（*'al pene*）が、「の眼前で」と解釈できることから、父親テラの眼前で何かがあったと理解された。こうした想定が動機となって、すでに存在していた人気のある「偶像を打破するアブラハム伝承」が、それまでには重視されていなかった視点が加わった解釈として発展したように思われる。

『タルグム・偽ヨナタン』

創世記ラッパと同様に、創世記11.28を説明するために本伝承が置かれている。B. 偶像をめぐる論争が主眼となり、その過程でC. 偶像破壊行動が含まれる。また、偽ヨナタンでは、ハランの悪人ぶりが際立つという点でE. ハランの死についての関心が強いと言える。また短いながら火の言及も忘れていないことから、D. 火のモチーフが重要である。他のタルグムでもこの句やウルという地名に対しては、「燃える炉」が言及される³¹⁾。

『クルアーン』

ここで挙げた個所では、構成要素B. (2) 偶像をめぐる論争、vs. 住人、C. 偶像破壊行動、D. 火のモチーフ、が中心になる。本稿で挙げた個所以外でも、偶像崇拜に対する論争にアブラハムが絡んだ話は、クルアーンには多く記録されている。例えば、家畜

章（スーラ6.71）では、父親との論争の中で、惑星崇拜の愚を説く。ここでは、唯一の神に到達する思考の道筋が表れているという点では、A. 唯一神の認識に該当する。イスラームにとっても、偶像崇拜を打破するアブラハムの像は重要であったことが窺える。

『クルアーン』の記事では、『創世記ラッバ』での記事との並行性が指摘される。上記の訳出した箇所では特にC. 偶像破壊行動について、最も大きい偶像によって他の偶像を破壊させるという策略を使っている点では（スーラ21.57-64）、『ヨベル書』『アブラハムの黙示録』よりも、『創世記ラッバ』での伝承に近い。他方、『創世記ラッバ』では、父と支配者（ニムロデ）との対立であるのに対して、『クルアーン』ではあくまでも住民との対立としている。しかも、D. 火のモチーフは、『クルアーン』では本稿で挙げた箇所だけで言及されるようであるが、『創世記ラッバ』では、炉の事件も含めて、ラビ文献の様々な箇所時代を超えて多数存在しており、常にニムロデがアブラハムに対峙する像として言及される³²⁾。『創世記ラッバ』で重要事項であったE. ハランの死、もクルアーンでは特に言及されない。またクルアーンでは、住民が最終的にアブラハムの主張を聞き入れているのに対し、『創世記ラッバ』のアブラハムは、最終的に偶像崇拜の地を後にする。

こうした違いから、『創世記ラッバ』では、異文化、他者を象徴するニムロデとの決別、偶像崇拜からの決別の象徴としての役割をアブラハムが果たしているのに対して、『クルアーン』でのアブラハムは、地元住民を一神教崇拜に説得する役割を果たしていると考えられる。

4. 伝承群の区別：父テラ・兄ハランとの関係を中心として

本稿で扱った伝承群は、上記の構成要素がそれぞれの文書で変化し、再構成された微妙に異なる伝承群である。従って、先に論じた構成要素による個々の資料の特徴は、それぞれの文書でのこの伝承の方向性を知る指針にはなるが、伝承群を区別することは難しい。おそらく、これらの伝承群を大別する最大の因子は、父親テラ、兄ハラン及び親族に対する、アブラハム、または伝承者の態度である。と同時に、それは、創世記12章にてなぜアブラハムが故郷の地を後にしたかについての解釈につながる。そこで、ここでは、各伝承でのアブラハムや語り手の父や兄に対する態度から、各文書の違いを明らかにしたい。

『ヨベル書』では、父親テラとの関係は良好であり、テラ自身偶像崇拜の虚しさを認知しているが、地元住民の手前、偶像を作らざるを得ないことを吐露している（14.6-8）。

また、他の文書での本伝承に見られるような、偶像が偶像を破壊したように見せる演出（創世記ラッパ、クルアーン）や『アブラハムの黙示録』のように、燃えてしまった偶像に「料理ができる」と皮肉るような言動はない。これらは、言わばこうした偶像を孝敬する父親への一種の皮肉でもある。しかし、『ヨベル書』ではこのような、偶像への揶揄を通してそれを崇拜する父親への揶揄になるような演出や行為はなく、あくまで放火によって直接的に偶像を破壊する。また、ニムロデのようなその地域との支配者との対立もない。最終的に父テラもアブラハムの出立を祝福している（14.29-31）。言わば、アブラハムと祖先の関係は維持されたままと言えるだろう。

『アブラハムの黙示録』では、冒頭部分にかなりの分量を割いて、アブラハムが父に対してその偶像崇拜の虚しさを主張していく。しかし、そこには、いくばくかの逡巡、父親に対する気配りも感じられる。しかし最終的には、父の家に天からの火が落ちてしまうように、第三者による父親との断絶の必要性があったように思われる。

これに対して、『創世記ラッパ』や『タルグム・偽ヨナタン』では、親族、家族との断絶感が漂う。『創世記ラッパ』のアブラハムの口から父テラを思い図るような言葉は発せられない。アブラムは、真っ向から父テラに対立し、父テラは支配者ニムロデと結託しており、父テラが自らニムロデに何のためらいもなくアブラハムを引き渡している。『タルグム・偽ヨナタン』では、父テラは舞台からは姿が消えており、アブラハムとニムロデの対立になっている。更に、兄ハランが呪術師であるかのような記述がされている。おそらく、ラビ・ユダヤ教文献、タルグムでは、アブラハムは、偶像崇拜を打破したのみならず、地上的な意味での親族関係からアブラハムを断絶させようとする意図があると思われる。一つには、この二つの文献での主要な思惑は、「ハランが父の前に死んだ」という句と結び付けることにあることも関わっている。同時に、地縁的、縁戚関係を一切断とうという意識が注目される。

他方、クルアーンでは、地縁的な関係を断つのではなく、そこに一神的概念を導入しようという動きが見られる。アブラハムは火に入れられるが、それを契機にその地を後にするのではない。アブラハムが火に投じられた事件は、その土地の住民がアブラハムの提示する神の力を理解するために使われているといえるだろう。

結論

アブラハムがいかに偶像を打破したかという伝承は、様々な並行記事が散見され、高い人気を博していたことが分かる。ユダヤ教の聖書解釈もクルアーンもこれらの長い歴史のある伝承物語をベースにしていたことが理解されると同時に、その違いも示唆され

てきた。

本稿では、この伝承に共通する構成要素を挙げ、それぞれの伝承でどこに比重があるかを見た。同時に、誰と対立しているかという視座からも併せて考察した。

すると『ヨベル書』では唯一神への思考に重点があり、『アブラハムの黙示録』では、偶像崇拝打破に比重があるように見受けられた。『アブラハムの黙示録』は、極めて偶像崇拝が身近に行われ、対抗しなければならなかったという状況に置かれていたことが、本稿の他文書での伝承との比較検証の中で明らかになったのではないかと。父親との関係について言えば、『ヨベル書』では、維持されている。『アブラハムの黙示録』では、アブラハムの父への敬意は見せながらも最終的に断絶している。『創世記ラッパ』やタルグムでは、本稿であげた構成要素が万遍なく表れていたが、その背後には、「ハラシがテラの前に死んだ」という聖書の句を解説するためという聖典解釈上の動機が強く働いていることが窺えた。同時に、対立者が常にニムロデという「他者」「敵対者」であること、また、アブラハムの親族も偶像崇拝に傾倒した者は、ニムロデ側と同値にするという厳しい態度も見られており、偶像崇拝そのものよりも、偶像崇拝に陥った者への批判としてこの伝承を用いていると考えられる。そして、偶像崇拝に依拠する親族と決別しようとする意志が感じられる。『クルアーン』での伝承は、偶像崇拝の愚を説く場面が多数あり、対立者が地域住民であることが特徴であった。しかし、アブラハムはそこを去らない。偶像崇拝者を一神教に向かわせそこで居住するというイスラームのおかれた状況を反映しているように思う。

ここでは第二神殿時代文学とユダヤ教聖書解釈、クルアーンにテキストは限定されたが、今後、キリスト教教父、思想家の聖書解釈、言説を広く渉猟し、アブラハムの偶像崇拝打破がどのように受容されているのかを踏まえて、より複合的な一神教理解を図りたい。

注

- 1) 市川裕「罪の赦しと父祖の徳—ユダヤ教『スリーホート』の祈り—」『筑波大学地域研究』6 (1988)、259-75頁。
- 2) ローマの信徒への手紙4.11、ガラテヤの信徒への手紙3.6。
- 3) J. グルニカ『聖書とクルアーン：どこが同じでどこが違うか』(矢内義顕訳)、(東京：教文館、2012)、145-47頁。
- 4) N. Solomon, R. Harries, T. Winter eds., *Abraham's children: Jews, Christians, and Muslims in conversation*, (London: T&T Clark, 2005); Joan Chittister et al. eds., *The tent of Abraham: stories of hope and peace for Jews, Christians, and Muslims*, (Boston: Beacon Press, 2006); G.

Atsmon et. al., "Abraham's Children in the Genome Era: Major Jewish Diaspora Population Comprise Distinct Genetic Clusters with Shared Middle Eastern Ancestry" in *American Journal of Human Genetics* 86 (2010), pp.850-59; E. Noort, "Abraham and the Nations" in M. Goodman, G. H. van Kooten and J. T. A. G. M. van Ruiten eds., *Abraham, the Nations, and the Hagarite*, (Leiden, Boston: Brill 2010), pp. 3-31.

- 5) アブラハムにちなんだ一神教の概念が、宗教対話における一種のスローガンとしての役割を果たしていることについては、上掲 E. Noort, "Abraham and the Nations," p. 4 参照。また、N. Solomon, R. Harries, T. Winter eds., *Abraham's children* も、各宗教伝統におけるモーセや諸概念を扱っているが、書のタイトルとしてはアブラハムが選ばれている。しかし、アブラハムの名を掲げた宗教対話を無批判に楽観的に捉えることにより、他のヒンズー教等の宗教伝統を排斥してしまうことの危険性については、P. Joyce, "Abraham from a Christian Perspective," in N. Solomon, R. Harries, T. Winter eds., *Abraham's children*, pp. 18-27 (26-27) 参照。
- 6) 例えば、K. J. Kuschel, *Abraham: Sign of Hope for Jews, Christians and Muslims*, Continuum, (New York : Continuum, 1995); A. Shinan, M. Lahham, M. A. Sway, *Abraham in the three monotheistic faiths*, (Jerusalem: PASSIA, Palestinian Academic Society for the Study of International Affairs, 1999); M. Goodman, G. H. van Kooten and J. T. A. G. M. van Ruiten eds., *Abraham, the Nations*; A. シンアン「人間アブラハムの生涯」『ユダヤ学会議4号：ユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムの相互作用—歴史的、文化的見地から』（京都：同志社大学一神教学際研究センター、2011）、72-90頁; J. グルニカ『聖書とクルアーン』。
- 7) 例えば創世記15.6は、キリスト教では新約聖書ローマ人への手紙4.1-25、ガリラヤ人への手紙3.6-14他、ヘブル人への手紙11.18-19、ユダヤ教では創世記ラッバ38・13、イスラームではスーラ3.65, 67, 68他で言及される。E. Noort, "Abraham and the Nations," p. 4, n. 2 参照。
- 8) 日本聖書協会、新共同訳に依拠。
- 9) アブラハムという名前は、創世記17章で割礼を施した時点で与えられる名前であり、ヘブライ語聖書の創世記11章の段階ではアブラムである。しかし、本稿で取り上げる各文書の伝承では、創世記11章の時点でのアブラハムに対しても、アブラム、アブラハム両方が用いられており、また偶像破壊伝承に関してはアブラムとアブラハムの名称の違いは反映されていないと考えられるので、混乱を避けるために、本稿本文中ではアブラハムで統一する。テキスト訳出では、それぞれのテキストに応じてアブラム、アブラハムを使いわけるとともに、また『クルアーン』ではイブラヒームを用いる。
- 10) シンアンによれば、新約聖書でのアブラハムの扱いは、彼の人間としての生涯よりも、偉大なる信仰の人、義の人という理想像であり、彼になされた祝福、約束、選び、といった神学的事項に関心がある。従って、本稿で取り上げるような、アブラハムの聖書以前の生涯にかかわる出来事、また非常に人間くさいイメージのアブラハムには関心が薄かったということが言えるのではないか。シンアン「人間アブラハム」77-78頁。少なくともオリゲネスの創世記註解では、創世記11章26節前後部分の説教

や注解で、本稿で取り上げる伝承を彷彿させる記述はない。Origen, *Homilies of Genesis and Exodus*, trs. R. H. Heine, (Washington D. C.: The Catholic University of America Press, 1982). より総合的なキリスト教の聖典解釈集においても、創世記11章26節前後に、「偶像を打破するアブラハム」を彷彿させる記事は収録されていない。A. Louth ed. *Ancient Christian Commentary on Scripture, Old Testament I, Genesis I-II*, (Chicago, London: Fitzroy Dearborn Publishers, 2001), pp.173-75. 左記個所には、アウグスティヌス、ヒエロニムスの解釈が収録されているが、テラが偶像崇拜にかかわっていたこと、またハランの死について言及のある解釈は収録されていない。実際には、「偶像を打破するアブラハム」の並行個所がキリスト教伝統に存在していたとしても、少なくともこうしたコレクションを編纂する研究者の関心には止まらなかったということを表している。つまり、キリスト教におけるアブラハム解釈研究においても、神学的、抽象的側面に関心があるということが観察される。P. Joyce はキリスト教解釈におけるアブラハム解釈の重要事項として「信仰」「普遍主義」「契約」に注目している。P. Joyce, *Abraham from a Christian Perspective*, pp. 19-21.

- 11) J. グルニカ 『聖書とクルアーン』 138-152頁；シンアン 「人間アブラハム」 87頁。
- 12) M. Goodman, G. H. van Kooten and J. T. A. G. M. van Ruiten eds., *Abraham, the Nations*; N. Solomon, R. Harries, T. Winter eds., *Abraham's children* においても、各論考は、時代別、宗教別に分類されている。シンアン 「人間アブラハム」 では、キリスト教、ユダヤ教、イスラーム全ての宗教から、比較的多数のテキストが引用されている。
- 13) ヨベル書については、J. T. A. G. M. Van Ruiten, "Abrham and the Nations in the Book of Jubilees," in M. Goodman, G. H. van Kooten and J. T. A. G. M. van Ruiten eds., *Abraham, the Nations, and the Hagarite*, pp. 105-138. シンアンは、この物語のルーツは広いとしながら、クルアーンのアブラハム解釈の一例としてクルアーンからのテキストを紹介、分析している。シンアン 「人間アブラハム」 87頁。
- 14) アブラハムと国家、祝福、等、抽象的概念や、アブラハムの生涯のクライマックスでもある創世記22章におけるイサク供犠（アケダー）に比重が置かれる。アケダーについては、S. Spiegel, *The last trial: on the legends and lore of the command to Abraham to offer Isaac as a sacrifice: The akedah.*, J. Goldin trs., (New York Schocken Books, 1969) 他多数。
- 15) 外典類では、*Pseudo-Philo*, またラビ・ユダヤ教文献では、出エジプト記ラッパ23・4、*Abot de Rabbi Natan* 33, *Pirque de Rabbi Eliezer* 26他、多数。また偶像崇拜打破の部分はないが唯一神への思索に関する描写は『ヨセフス古代誌』にも見られる。
- 16) ヘブライ語聖書レビ記25.10以下に、49年を経た50年目にあたるヨベルの年の規定がある。ヨベルの年は、聖なる安息年であり、全住民が解放され、耕地の耕作、収穫が禁止される。土地は元の所有者に戻り、負債は免除される等の様々な規定がある。本書の書名は、このヨベル年に由来する。
- 17) S. Wintermute trs., *Jubilees*, in J. H. Charlesworth ed., *The Old Testament Pseudepigrapha*, vol. 2, (New York, London: Doubleday, 1985), pp. 43-45.
- 18) R. Pubinkiewiz, trs. *Apocalypse of Abraham*, in J. H. Charlesworth ed., *The Old Testament*

- Pseudepigrapha*, vol. 1 *Apocalyptic Literature and Testaments*, (New York, London: Doubleday, 1983), pp. 681-88.
- 19) L. Ginzberg, *The Legends of the Jews*, vol. V, (Philadelphia: Jewish Publication Society of America, 1967-1969), p. 210, n. 16参照。
 - 20) タルグム文学の概論、研究史については、E. Katsumata, *Priests and Priesthood in the Aramaic Targums to the Pentateuch: New Approach to the Targumic Literature*, (Saarbrücken: Lambert Academic Publishing, 2012), pp. 38-104.
 - 21) J. グルニカ 『聖書とコーラン』。シンアン 「人間アブラハムの生涯」 85-87頁。
 - 22) M. Maher, *Targum Pseudo-Jonathan: Genesis, The Aramaic Bible 1B*, Edinburgh, 1992, p. 51, n. 17.
 - 23) S. Wintermute trs., Jubilees, in J. H. Charlesworth ed., *The Old Testament Pseudepigrapha*, vol. 2, pp. 35-142 から訳出した。
 - 24) R. Pubinkiewiz trs., Apocalypse of Abraham, in J. H. Charlesworth ed., *The Old Testament Pseudepigrapha*, vol. 1, pp. 689-705より訳出。
 - 25) 不明単語。ギリシア語 *kokkina*, (緋色の布) のことか。R. Pubinkiewiz trans., *Apocalypse of Abraham*, の該当箇所注参照。
 - 26) 7章は、大別して二つのバージョンに分かれる。本稿では、R. Pubinkiewiz による *The Volokalamk Peleja Tolkovaja*, Moscow, Lenin Library, Mosk. Dukh. Akad. 172/549, fols. 85-101他から構成したバージョンに準じて訳出した。
 - 27) Theodor-Albeck eds., *Bereshit Rabba* (Berlin: Akademie für die Wissenschaft des Judentums, 1936) に準じた。
 - 28) E. G. Clarke, *Targum Pesudo-Jonathan of the Pentateuch: Text and Concordance*, (Hoboken, New Jersey: Ktav Publishing House, 1984) に準じた。
 - 29) 井筒俊彦訳 『コーラン』 (東京: 岩波書店, 1999) に準じた。
 - 30) 父テラの誕生以前に、その地 (ウル) で偶像崇拜が蔓延していたことが語られている。ヨベル書11: 4-7参照。
 - 31) タルグム・ネオフィティの創世記11.28参照。
 - 32) 註21参照。